TOKYO SOCIETY OF ARCHITECTS & BUILDING ENGINEERS

住宅建築賞 入賞作品展

RESIDENTIAL ARCHITECTURE PRIZE

2012

| 主催 | 社団法人 東京建築士会

住宅建築賞
入賞レセプション
オープニングパーティー

2012.7.2 月

申込先着順 定員:150名 入場無料

入賞レセプション

16:30～18:30
ディーアイシービル17F DIC大会議室

オープニングパーティー

19:00～20:30
DIC COLOR SQUARE

※入賞レセプションは審査委員による入賞作品講評、
および入賞者とのディスカッションになります。

住宅建築賞 審査委員

委員長：塚本由晴
委　員：安藤邦廣 ／ トム・ヘネガン ／
中谷礼仁 ／ 平田晃久

協　賛

株式会社 建築資料研究社 日建学院
株式会社 総合資格

後援予定

公益社団法人 日本建築士会連合会
一般社団法人 東京都建築士事務所協会
一般社団法人 日本建築学会 関東支部
社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
株式会社 新建築社
日経アーキテクチュア

主　催

社団法人 東京建築士会
［ 申し込みお問合せ先 ］
東京都中央区晴海 1-8-12 オフィスタワー Z 棟 4F
tel.03-3536-7711　fax.03-3536-7712
e-mail.info@tokyokenchikushikai.or.jp
www.tokyokenchikushikai.or.jp

DIC COLOR SQUARE

| 協力 | DIC株式会社／DICカラーデザイン株式会社

東京都中央区日本橋3-7-20 ディーアイシービル1F
tel.03-5203-7780　www.color-square.com

住宅建築賞 入賞者

住宅建築賞 金賞
金野 千恵

住宅建築賞
今村 水紀 ＋ 篠原 勲
川辺 直哉
西久保 毅人

奨励賞
森 清敏 ＋ 川村 奈津子

住宅建築賞 入賞作品

平成24年 ｜ 社団法人 東京建築士会

応募主旨［ 委員長　塚本 由晴 ］

住宅は、毎日の暮らしのためにある。だから世の中でどんなことが起ころうと、惑わされず、ぶれずに設計したい。しかし、今年は大地震、津波、原発事故、に台風まで加わって、どうしても特別な年になってしまった。それまで意識しなくてよかったことまで、意識しなければ生活できなくなった。例えば夏の盛りの一杯の水。冷たいほうがいいか、ぬるいほうがいいかと聞かれたら、誰だって冷たい水を望む。その小さな、個別の判断の一つ一つが、電力供給という負担を都市に与える。しかし、現代都市は自らエネルギーを生産できないから、どこか別のところに依存するしかない。そして、冷たい水を望んだ当事者達から遠くはなれた場所が、エネルギーの生産地になる。邪魔なものを他人におしつけないと成り立たない暮らしと、冷たい水のある暮らし。それらは、行政区分を超えた、国策まで含むマクロな話と、口の中でのミクロな話の、大小異なるスケールに引き裂かれてはいるが、実は同じ暮らしなのである。そんなスケールによる分離に、住宅建築もかなり加担してきたはずである。だとすれば逆も成り立つのではないか。すなわち、ミクロとマクロをつなぐ住宅である。それがどんなものになるかはわからないけれど、それを生み出す想像力は、個々の生活が想定する全体性の見直しを迫る。全体性の見直しは、住宅建築を不安定な状態に放り出すことになるけれど、そこに新たに均衡が見出されるはず。そこに、希望を感じたい。

応募要項

（1）上記の主旨にかなうもの／（2）一戸建住宅、集合住宅及び併用住宅等とする（大幅な増改築、公共の建築も含む）／（3）原則として作品は最近3年以内に竣工したもの／（4）雑誌等に発表したものでもよい／（5）建築物の所在地は東京圏とする／（6）応募の点数は自由とする／（7）審査委員の関与した作品は応募できない

応募要件

応募資格	応募作品を設計した建築士（法人組織の場合は設計担当した建築士） 登録料 本会正会員 無料（申込時に入会した方を含む） 会員外　1点につき5,000円 （作品を郵送する場合　登録料は現金書留にてお送りください）
提出期限	平成24年1月25日（水） （郵送の場合は、1月25日（水）の消印があり審査に間に合うよう到着したものは有効）
提出先	社団法人東京建築士会　住宅建築賞係 〒104-6204　中央区晴海1-8-12オフィスタワーZ棟4階 TEL 03-3536-7711
提出資料	申込書及び本会指定A2版台紙 図面及び完成写真数点（内・外観）、平面図、立面図、断面図、配置図、設計主旨（300字以内）等をA2版台紙一面（本会指定の用紙・原則として縦づかい、パネル化しない）におさめること。なお、写真の大きさ、図面等の縮尺及びレイアウトは自由とする。プレゼンテーションの表現自体は、審査の対象としない。 〔申込書及び本会指定A2版台紙は本会事務局において頒布します。郵送希望の場合は、宅配便着払いにてお送りできます。その場合、氏名、送付先、連絡先、会員番号等を明記のうえ、FAX（03-3536-7712）にてご請求ください。なお、事務処理の迅速化を図るため、宅配便着払い了承の旨お書き添えください。〕

審査委員

委員長	塚本由晴
委　員	安藤邦廣／トム・ヘネガン／中谷礼仁／平田晃久

審査

第1次審査（書類審査）に通過したものは原則として現地審査する。

審査結果（平成24年 住宅建築賞）

応募点数 101点 ｜ 住宅建築賞入賞 4点（内 金賞1点） ｜ 奨励賞 1点

住宅建築賞 金賞	向陽ロッジアハウス（神奈川県）	○設計者：金野千恵（建築設計コンノ）○建築主：金野和子／金野美和 ○施工者：有限会社 工藤工務店（建物構造:木造）
住宅建築賞（受付順）	駒沢公園の家（東京都）	○設計者：今村水紀＋篠原勲（miCo.）○建築主：今村水紀／篠原勲 ○施工者：有限会社 伸栄（建物構造:木造）
	LUZ白金（東京都）	○設計者：川辺直哉（川辺直哉建築設計事務所）○建築主：根村城太郎 ○施工者：株式会社 佐藤秀（建物構造:鉄筋コンクリート造）
	ISANA（東京都）	○設計者：西久保毅人（ニコ設計室）○建築主：バシスト ニティアキショール／下窪美奈子 ○施工者：山縣建設 株式会社（建物構造:鉄筋コンクリート造＋木造）
奨励賞	深沢の家（東京都）	○設計者：森清敏＋川村奈津子（株式会社 MDS）○建築主：山本理／山本由布子 ○施工者：渡邊技建 株式会社（建物構造:木造、一部鉄筋コンクリート造）

参考資料

1次審査結果　平成24年2月7日（火）実施。応募作品101点より、1人6点～8点を投票（審査委員5名）

投票した作品番号

審査委員	作品番号								合計
塚 本	31	38	63	95	84	12	78	77	8点
安 藤	5	29	31	43	75	76	89	95	8点
トム	9	14	40	58	62	85	95	71	8点
中 谷	9	29	40	78	95	43	54	63	8点
平 田	31	19	3	9	38	98	—	—	6点

投票結果（下記25点より、議論）　（計25点）

獲得票数	作品番号	合計
4票	95	1点
3票	9、31	2点
2票	29、38、40、43、63、78	6点
1票	3、5、12、14、19、54、58、62、71、75、76、77、84、85、89、98	16点

31 38 63 75 95　左記5点を1次審査通過とし、2次（現地）審査対象とした。2次（現地）審査は、3月1日（木）に実施した。

1次審査風景（上・下）

平成24年住宅建築賞

作品集講評

総評

▼ 塚本 由晴

東日本大震災後、はじめての東京建築士会住宅建築賞である。東京圏では、千葉など一部の地域の住宅に、今回の地震による直接の被害があったが、基本的には震災前と変わらない生活が今も続けられている。これは住宅という建築が、そうすぐには変えることのできない物理的な重さを持つことで、我々の暮らしに安定した基盤を与えてくれる一方、一度成立してしまうと我々の生活を枠にはめ込み、思考まで象ってしまう働きがあることを示している。震災後に感じた焦燥、悔悟の念、節電のドタバタはどこへ行ってしまったのかというぐらいに、我々は震災前につくられた空間に再びなれはじめているのかもしれない。これまでと変わらないエネルギーシステムの中で、夜になれば煌煌と電気のともる、いつでもどこでも電気を利用できることが前提の生活を続けている。でも本当は、そういう生活を疑ってみたくなるような認識の変化が、震災を機に一人一人の中に引き起こされているのではないだろうか。そういう変化が、すぐに住宅の空間に現れるということは、建築の重さ、鈍さゆえに考えにくいことではある。応募作品も、そのほとんどが震災前に設計されたものである。しかしその中にも、変化への兆しはあるはず。それをすくいあげ、社会に提示することによって、悩みながらもそこに辿り着いた建築家、建て主、施工者を勇気づけ、また彼らの存在によって社会が勇気づけられることが、東京建築士会住宅建築賞の役割であろう。今回選出された5作品は、そうした賞の役割に、かたちを与えてくれるという意味で、どれもすばらしいものであった。特に駒沢公園の家、ISANA、向陽ロッジアハウスの三作品は、どれが金賞をとってもおかしくない力作で、その三点に議論が集中することになった。

駒沢公園の家は、減築と増築をうまく組み合わせて、既存の木造住宅を、小屋を並列したような構成に作り替えている。これにより、空間の階層性がなくなり、隣接する畑も含めてひとつの生活領域であるかのような広がりを獲得している。ISANAは屋根型を持つ複数の棟が半開きの中庭をとりまくことにより、小さな集落の如き風景をつくりだし、その中にオーナーの住宅と賃貸室を紛れ込ませている。この賃貸部分は子供の成長や、結婚などにあわせて、家族の領域を拡張、縮小できる余白としても考えられている。これにより世代の継承にともなう空間の問題と、住宅地の更新にともなう都市空間の問題に対して、統合的な解決が示されている。向陽ロッジアハウスは、同じ敷地に家を建替えるにあたり、敷地を庭と建物に二分し、庭に面する壁面に、2層にまたがる大きな開口を設けてロッジアとするものである。ここは植物の瑞々しいふるまいや匂いをまぢかに感じられる場所であり、内部の室の開口が集められたこの住宅の中心である。さっそく近所の人が寄って、お茶を飲みながら花や木の話をしていく場所になっているそうである。

これら三作品に共通するのは、住宅地の更新を背景に、計画前後の時間への想像力が、住宅の空間の現在に還流しているところである。そのことにより、今目の前にある物事を短期的視点で判断せずに、より長期的観測の中で判断しようとしている。こうした時間尺度の多重性や、それにまつわる愛すべき配慮が、ミクロとマクロをつなぐ、空間の豊かさにつながっているのである。その上で、もう一度三者を見直すと、駒沢公園の家の、建物を切開する方法の斬新さは、建物の寿命を延ばすというよりは、むしろはかなさに訴える現代美術のようである。ISANAの将来への展望とその空間的解法、つまりマネジメントまでを含めたプロジェクトの枠組みには、目を見張るべきものがある。しかし、住居形式としての新鮮さ、空間的な驚きというものがもっとあっても良いはず。対して向陽ロッジアハウスの庭を食べんと大きく口を開けたようなロッジアは新鮮な驚きだった。このロッジアには朗らかさだけでなく、複合的なスケールが良く調整された心地よい緊張感がある。前の家で培われた近所づきあいや、植物を愛する居住者の性向などの過去に属する事柄を、これからの生き方の基礎とするための空間的な枠組みとして、ロッジアを中心とした住居の形式が発見されている。高齢の母親の暮らしに建築の方から近づいて行く優しさに溢れた作品である。審査は最終的にISANAと向陽ロッジアハウスの決選投票となり、三対二の僅差で向陽ロッジアハウスが金賞に選出された。

昨年は金賞が出せなかったが、今年は非常に実りある審査をさせていただいた。全ての応募者と応募作品に、この場を借りて御礼を申し上げたい。

住宅建築賞 金賞

向陽ロッジアハウス

設計者
金野千恵
（建築設計コンノ）

「モダニズム」建築家は、素材・ディテール・家具、全てが芸術作品として統合された建物を'Gesamtkunstwerk'というドイツ語を用いて言い表してきた。現代建築に対して、私たちは隅々にまで行き渡る一貫したコンセプトを期待するが、時にこれは人々の生活を極端に簡略化してしまう。私たちの気分やニーズは一日を通して変化するものであり、住宅はこのような変化を許容しなければならない。
「向陽ロッジアハウス」は非常に異なった部屋の集合であり、様々な性質・形・使われ方をする。気分の移り変わりに合わせて移動しながら快適な時間を過ごすことのできる住宅である。

この住宅の焦点は庭にある。はっきりと家から切り離され、「ロッジア」に縁取られて全ての部屋から眺められる。ロッジアは長く薄い空間で、門のある低い壁によって庭から切り離され、そこは縁側やテラスというより、外部の部屋あるいは高めのバルコニーといった印象を与える。これは独特で魅力的な発明である。
この住宅の魅力は、極めて普通であると同時に極めて特異である、という点にある。様々な空間が人々の生活スタイルを強要することなく、多様な使い方を誘い出している。

▶トム・ヘネガン

住宅建築賞

駒沢公園の家

設計者
今村水紀 ＋ 篠原勲
（miCo.）

この住宅は、東京のありふれた現実に対して、機知に富んだ建築的介入を提案している。細分化された敷地にひしめく古い木造住宅。建て替える世代は経済的に潤沢ではなく、結果として無味乾燥な建売住宅が増えていく。それらは単にひしめいているだけで外部との有機的な接点がない・・・。どこにでもあるような、しかし考えてみれば東京の根本にあるような問題だ。
この案の優れているところはこれらの問題にきわめてクリアに答え、それを明るくて魅力的な生活のイメージに結びつけているところだ。しかもとてもシンプルな建築的方法によって、である。作者の自邸であり、東京に住む自分たちが生きる条件を実践によって問い直す潔さと新鮮さがある。
不要になった表層材を取り除き、木造の架構をあらわにする。その架構を部分的にカットオフしたり補強することによって、全く新しい魅力をもった住空間が出現している。この建築的介入が乱暴とも言えるほど単純に、かつ機知に富んだ形で行われているために、普通の方法ではなかなか生み出されないような変化に富んだ空間が、特段の意図性や押しつけがましさなしに実現されている。
この提案が、金賞を逃した要因があるとすれば、細部に至るまで丁寧に行われた仕事が、作者の出身である SANAA 的な雰囲気をあまりに感じさせるところ、あるいは、架構を切断する手つきが、ある特定の美学を想起させたところかもしれない。個人的には「作家」の「個性」という観点からこの案を批判したくはない。しかし、この考え方の持っている普遍的な強さ――これからの住宅が同じような方法でもっと豊かな生活像に近づいていくような――に惹かれた者としては、個別の美意識に還元されない骨太さをもっと提示できたのではないか、という点だけが気になった。もちろん、それらを考え合わせたとしても、様々な示唆に富んだ、見事な作品であることは間違いない。

▶ 平田 晃久

LUZ白金

設計者
川辺直哉
（川辺直哉建築設計事務所）

近年、密集した都心の住宅地を更新する有力な手法として、小規模の集合住宅が多く作られている。それらは耐火性と遮音性を考慮した RC 造であり、斜線制限などで上の方が斜めに削られ、それに呼応して住戸のかたちや大きさが均一でない、などの特徴を共有している。また賃貸で単身者やカップルの入居が多いため、高齢化する地域に、若い世代が入り込むきっかけになることも期待されている。東京の新しい建築タイプとしての条件は揃っているが、その可能性の捉え方により、それぞれの実践は微妙に異なる姿となる。LUZ 白金では、共用廊下の拡張による住民共有のサロン的な空間に、その可能性と期待が示されている。設計者の事務所も一部に入居することで、この空間の運営に関わっているのは責任感があって好ましいが、それがミニマルなデザインと重なると、集合住宅にしては建築家の統制が利き過ぎの感は否めない。例えばこのサロンがファサードに表出し、街路とのコミュニケーションが重なれば、もう少し楽な感じになるのではないだろうか。

▶ 塚本 由晴

ISANA

設計者
西久保毅人
（ニコ設計室）

武蔵野の第一種と第二種住居地域の境にたてられた、オーナーの住宅兼賃貸住宅である。
アジアの郊外を歩いていると、軒先に皆がたたずんで日常生活が繰り広げられている。昔の日本にもあったはずだが、そんな光景がもしかしたら、再び新しく作り出せるかもしれないと思わせるような住居形式の提案である。クライアントはインド人である。インドで家を建てる際には、自分たちのスペースの他にいくつかの貸し室を作る風習があるという。その貸し室は時間とともにその役割を変えていく柔軟さも持っている。1階部分をコンクリート基壇としているため、建物の背の高さがそれほど気にならない。小さいベンチ等をまわし次第に中に引き込む手法は魅力的である。まるで小さい集落のようでもある。さらにこの建物が道に対して提供した生活のデザインが、次第に付近の町なみにも影響を与える予感すらする。
1階から2階にかけてスケールを変え、反転し、つながっていくオーナーの住居部は特に魅力的であった。貸し室についても同じくらいの魅力がほしかったが、それでも充分高いレベルでそれら諸室をまとめている。東京の住み手と建築士が一緒になってできることを示し得たという意味で、賞に値する作品である。

▶ 中谷 礼仁

奨励賞

深沢の家

設計者
森清敏 ＋ 川村奈津子
（株式会社 MDS）

半地下と屋根裏の利用は、敷地の狭い都市住宅で有効な手法である。ヨーロッパでは地下に貯蔵庫、屋根裏に寝室という形式が都市住宅に早くから定着していた。深沢の家は、この形式にスキップフロアを導入して空間の連続性を図ったところに独自で明確な提案がある。これからの都市住宅の空間構成に一つの方向性を与えるものとして評価したい。その屋根裏を利用した家族の生活空間は広く、木造の屋根架構にも現代的な工夫が見られるが、採光や通風に対する考え方がものたりない。大きな屋根に包まれたリビングは、軒を差し出して外に開くこともできたはず。立体的な空間構成を室内環境的に捉えれば、棟の開口部は重要で、その採光と通風に工夫があればこの家はもっと生気に溢れたものとなったであろう。せっかくの木の架構が生きていないことが惜しまれる。また、スキップした3層構成を繋ぐものとして、階段室に通し柱のデザインもあったのではないか。残された課題に今後の取り組みを期待したい。

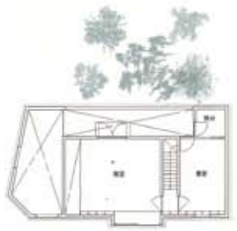
▶ 安藤 邦廣

向　陽　ロ　ッ　ジ　ア　ハ　ウ　ス

周辺配置図 1:000

1950年代に開発された東京郊外の住宅地における戸建住宅。周辺敷地が細分化するなかでも当時のまま約45坪の大きさを保つ計画地では、独立の要望である広々とした庭を残した理想的な建ち方が可能となった。敷地を二分した南に敷木や煙からなる庭、北に建物を配し、双方をロッジアと呼ぶ屋根付きの外部空間で繋いだ。ロッジアの室内側には各室を種々の窓と共に囲め、庭側には高さ3.5m、幅7mほどのガラスのない大窓を設った。そこでは、住人のふるまいが季風に乗った花の香りや新緑の移ろい、落ち葉の動き、鳥や動物、隣人と交わることになる。つまり、敷地の中心であるロッジアで過ごす人間は、自然や周辺環境といった敷地境界を越えた広がりへと結びつけられるのである。

1階平面図兼配置図 1:150



2階平面図 1:150

A-A' 断面図 1:150

B-B' 断面図 1:150

駒沢公園の家

水造の軸組を更新して、住宅地の風景を変えていく

第34年の木造家屋(増改築前)

工事中の様子

第34年の木造家屋の増改築。木造家屋が密集する環境を「木造軸組の集まり」ととらえてみると、この住宅地は簡単に更新することのできる風景のように見えた。木造軸組は、梁や柱を継いだり足したりして建物を更新し、現在の要求に合う空間に進化させることができる。私たちは、3つの小さな家屋を建てた。ひとつは新築で、残りは古家を2つに分割したものである。家屋を小さくすることで、増築による周辺への圧迫感を減らした。各々の家屋は外部に囲まれ、色々な方向からの採光や通風に恵まれる。一方で、各々の家屋はガラスでつながれ、外観からは想像できない大きなひとつながりの空間となっている。この小さな木造軸組の更新が、一般的な住宅地を、新しい風景に変えていくきっかけになればと思っている。

既存

増改築後

リビングのような共用スペースをもつ「大きな家」　【LUZ白金】

断面図　1:200

都内の町工場や住宅が密集する中に建つ、1階建て13戸の賃貸集合住宅である。敷地のほぼ四方が囲まれる状況で、住環境は享受されるだけではなく、つくり出す必要があると考えた。ここでは共用部がその役割を担い、採光・通風・風景といった外部へ求める要因が内側に取り込まれ、各住戸で共有されている。共用部は連続や興の空地、隣家の屋根の上といった設けを選びながら、隣家と方位に応じて周辺と関係付けられている。風は上下階を通じて抜けていき、一日を通して様々な方向から陽の光が入る。建築効果による自然な熱対流も、快適な住環境形成に大きく寄与している。

1階平面図 1:200

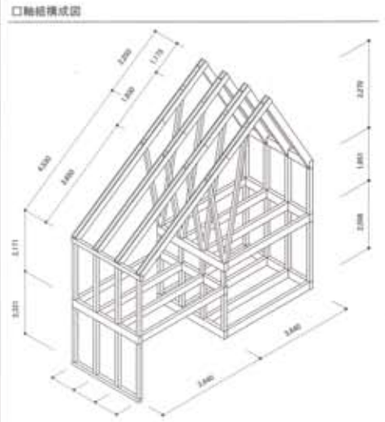
2階平面図　3階平面図　4階平面図　5階平面図　屋根伏図

ISANA　―森の中の小さな家―

断面図 S=1/150

配置図 S=1/1300　平面図 S=1/250

ダイニング・キッチンからリビングを見上げる。軸組材の柱をV字型に配置することで大きなワンルーム空間を実現



深沢の家

日本には豊富な森林資源と世界に誇る木材施工技術がある。木造は安易にはスパンがとばせないことなどの制約があるのは事実だが、その制約こそを木造の特徴と捉え、空間にきちんと落とし込むことを考えた。

大きな空間を成立させるためには、梁の架け方、あるいは柱の落とし方に工夫が必要となる。また、柱には領域をつくり出す性質があり、その性質を生かしつつ、大きな空間における木造らしい柱の落とし方を考えた。この住宅においては、市場に流通している一般的な木材を組み合わせた梁とそれを支えるV字柱をならべることで、木造としてはやや大きな空間を実現していると共に、V字柱と組み立て梁により空間に領域をつくりだしている。

□建築概要

敷地面積：75.20㎡（22.79坪）
用途地域：第1種低層住居専用地域
建蔽率　：60%（50+10　角地緩和）
容積率　：100%
道路幅員：東側4.0m　西側6.0m
建築面積：39.75㎡（12.05坪）
延床面積：94.82㎡（28.73坪）

2階リビングを見る。V字柱は桁直交梁上中上の押さえを兼ねている

V字柱の付け根部材は金物RC、上部は曲り梁に対して一直線にむこうれの配置としている

外観

住宅建築賞受賞者プロフィール

向陽ロッジアハウス

金野千恵
Chie Konno

1981年：神奈川県生まれ
2005年：東京工業大学工学部建築学科卒業
2005～2006年：スイス連邦工科大学 派遣交換留学プログラム奨学生
2011年：東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻博士課程修了、博士（工学）
2011年～：神戸芸術工科大学大学院芸術工学専攻 助手
2011年：建築設計コンノ設立
2011年：オーストラリアクイーンズランド大学客員研究員
2012年～：京都精華大学非常勤講師

駒沢公園の家

今村水紀
Mizuki Imamura

1975年：神奈川県生まれ
1999年：明治大学理工学部建築学科卒業
2001～2008年：妹島和世建築設計事務所
2008年：miCo.設立
2009年～：女子美術大学非常勤講師

篠原 勲
Isao Shinohara

1977年：愛知県生まれ
2003年：慶応大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了
2003年～：SANAA事務所
2008年：miCo.設立

LUZ白金

川辺直哉
Naoya Kawabe

1970年：神奈川県生まれ
1994年：東京理科大学工学部建築学科卒業
1996年：東京芸術大学大学院修士課程修了
1997～2001年：石田敏明建築設計事務所
2002年：川辺直哉建築設計事務所設立
現在：東京理科大学、東京芸術大学、法政大学、東京電機大学 非常勤講師

ISANA

西久保毅人
Taketo Nishikubo

1973年：佐賀県生まれ
1995年：明治大学理工学部建築学科卒業
1997年：明治大学大学院理工学研究科修士課程修了
1997～1998年：象設計集団
1998～2000年：アトリエハル
2001年：ニコ設計室設立
現在：明治大学兼任講師

深沢の家

森 清敏
Kiyotoshi Mori

1968年：静岡県生まれ
1992年：東京理科大学理工学部建築学科卒業
1994年：同大学院修士課程修了
1994～2003年：大成建設株式会社設計本部
2003年～：MDS一級建築士事務所共同主宰
2010年：株式会社MDSに改組 代表取締役
現在：東京理科大学、日本大学非常勤講師

川村奈津子
Natsuko Kawamura

1994年：京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科卒業
1994～2002年：大成建設株式会社設計本部
2002年：MDS一級建築士事務所設立
2010年：株式会社MDSに改組 取締役